

提言

育てよう、 非認知能力

—これからの社会を
生き抜くために必要な資質—

香川大学

助教 鈴木裕美

これからの社会とはどのような社会でしょうか。予測困難な未来を生きるとは、どういうことでしょうか。今、幼児期の子どもは、半分以上が百歳を超して生きると言われています。ですから、人生が七十から八十年程度の時代によしとされてきた三ステージ（教育、就労、退職後）の生き方では、退職後の第三ステージが四十年以上となり破綻してしまいます。

グラットン博士の『ライフシフト』によると、今後はマルチステージの時代となり、教育、探索、実験、就職、個人事業主・起業などを順不同に自由に組み合わせながら生きていくことになるそうです⁽¹⁾。つまり、私たちが考える人生のレールのようなものがなくなるといことです。人はレールがないと不安になりますが、逆にレールから外れた多くの若者にとっては生きやすくなり、救いにもなります。これからは、自分でそれぞれ道を創っていく社会、大人の常識が通用しない社会が待っています。

そのような社会に必要なものはなんでしょうか。それはつまり、「非認知能力」です。非認知能力とは意欲や積極性、考える力、やり抜く力、自制心など目には見えない、数値で測ることもできない「生きる力」のことです。レールのない社会では、学歴があれば大丈夫、大企業に就職すれば大丈夫、公務員になれば大丈夫という保証はありません。「非認知能力」を生かして変化に順応し、目の前に進むべ

き道がないなら自分で創っていくしかありません。

具体的には、自分の興味や関心に従って自主的に探求していこうとする「積極性」が必要です。また、正解が分からない課題に対してどうするべきか考え、とにかくやってみる「行動力」、失敗したらそれと学びに変える「前向き成長思考」、そして諦めずもう一度チャレンジする「やり抜く力」や「自制心」が必要です。

非認知能力は目に見えない力と言いましたが、存在する場所は分かっています。非認知能力は、額の後ろに位置する前頭前野というところに存在し、脳全体の三割を占めています(図1)。これは地球上の生物で最も大きく、この部位が発達してきたからこそ、人類の繁栄が実現したと言えます。

前頭前野は出生時にはほとんど機能していませんが、親の適切な関わりによって安定した愛着が築かれると、二から三歳位から発達してきます。つまり、幼児期に生まれ、育まれ、成人後も発達し続ける能

力です。

非認知能力を育てるには、親の適切な関わりによって築かれる安定した愛着が必要です。なぜなら、安定した土台の上には非認知能力の芽は出てこないからです。

では、安定した愛着を築くにはどうしたらいいのでしょうか？愛着は子どもが望む三つのことを満たすことで築かれます。それらは、「愛してほしい(愛情)」「見てほしい、聞いてほしい、分かってくれてほしい(前向きな注目)」の三つです。これらが満たされて、子どもは安心感と信頼感を得ることができ、「自己肯定感」が育ちます。特に「認めてほしい(前向きな注目)」は自己肯定感を育む上では重要です。

「自己肯定感」とは自分の積み木に対するポジティブなイメージです。人は積み木を積み上げながら生きていますが、大人からまだ積み上げられてい

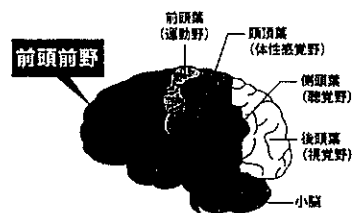


図1 脳の前頭前野の部位

い積み木を責められたり、隣の高い積み木と比較されて叱られたりすると、子どもは自分の積み木に自信がなくなり、嫌いになってしまいます。大人が子ども自身の積み木を認めることで、「自己肯定感」が育ちます。すると子どもは自分の積み木が好きになり、自主的に積み上げてみようという「やる気」が出て、自分の人生を前向きに探求するようになります。

子どもは集団生活の中で様々な遊びや体験をし、人との関わりを学ぶ機会を得ます。特に安定した土台と自己肯定感をもった子どもは、豊かな遊びの中で積極的な探索を楽しんだり、課題に試行錯誤しながら取り組んだり、ルールを守りながら自主的に行動したりします。その中で、一つ一つできることが増えて達成感や幸福感を覚えることで、非認知能力のある前頭前野が活性化します。

そのメカニズムは、脳の中央から前頭前野に向かってドーパミンが放射されることで喜びを生み出し、ドーパミンが繰り返し放射されることで脳の報

酬神経回路が強化され、前頭前野にある非認知能力が育つのです。例えば、子どもが自主的に遊びを考え、それに没頭することを楽しみ、かつ周囲の大人から励まされたり、ほめられたりすると、たくさんドーパミンが前頭前野に放射され、そこにある「積極性」や「自主性」、または「創造力」といった能力が発達するわけです。

たとえ失敗したとしても、次にどうすればうまくいくのかを考える機会を与えられ、もう一度トライすることを励まされる、つまり安心して失敗することができるポジティブな環境にいる子どもは、常に大人からの指示に従うようしつけられ、失敗すると叱られる子どもよりも、ずっと「自主性」や「考える力」といった非認知能力を育てることができ、自立した柔軟性のある人間に育ちます。

ここで、もう一度「これからの社会」について考えてみましょう。これからの社会は人生の中でマルチステージを経験し、自らの人生を自由にデザイン

する社会です。教育も好きなきに何度でも受けることができるようになり、同じ教室には年齢が異なる人たちがほとんどで、もしかしたら教室もなくなり、国境を越えてネットを用いた3D学習が主流かもしれません。自分を三十歳位まで探求してから、更に教育を受けたり、就職したり、試しに副業したり、もう一度教育を受けて今度は起業したり。

人生が百年もあるので、色々なことにチャレンジし、長い間生産的に生きる必要があります。これからの社会では非認知能力を育み、変化に適應することを目標にしていくことになります。そのために私たち大人が子どもにできることは、安定した愛着(土台)づくりです。重要なことは土台はいつでも作り直すことができること、特に保育者は指導の前子どもと土台をつくる必要があるということです。

土台づくりをしながら、自分の積み木がよいと思える「自己肯定感」を育てましょう。その土台の上から芽生える非認知能力に前向きな言葉掛け(ポジ

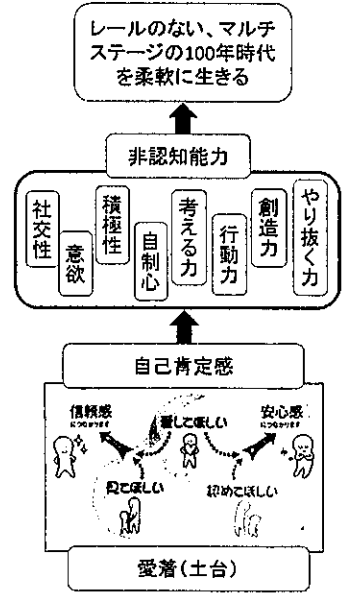


図2 愛着と非認知能力との関係

ティブシャワー)を浴びせ掛け、ドーパミンを出すのです。「失敗さえも新たな学びになる」とドーパミンが出れば、非認知能力はいつまでも発達し、自主的に生きる力を育ててくれます(図2)。

そしてもう一つ。私たち自身もお互いに非認知能力を育て合い、これからの百年時代の社会を子どもたちからも学びながら生き抜いていきましょう。目の前のレールを潔く手放して、新しく道をつくる姿を見せるのも大人の役割ではないでしょうか。

参考文献

- (1) リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット著 池村千秋訳(2016)『ライフシフト』東洋経済新報社